

SCITによる意図的テロ行為の検出

○中山 誠¹・李韓碩²

(¹関西国際大学人間科学部・²関西国際大学大学院人間行動学部)

キーワード：SCIT、テロリズム、皮膚コンダクタンス反応

Detecting an intended act of terrorism with the Searching Concealed Information Test

Makoto NAKAYAMA¹ and Hanseok LEE²#

(¹Kansai University of International Studies, ²Graduate School of Kansai University of International Studies)

Key Words: SCIT, terrorism, skin conductance response,

目的

国際組織犯罪防止条約（TOC）第5条は、重大な犯罪（長期4年以上の罪）の共謀又は組織的な犯罪集団の活動への参加の少なくとも一方を犯罪とすることを明確に義務付けている。これを受けて我が国でも2017年6月によりやくテロ等準備罪が国会で可決された。そして、組織的なテロ行為に関しては、計画段階で検挙することが可能となり、犯罪捜査における精神生理学的検出についても、新たな活用場面が期待されるようになった。すなわち、これまでであれば、既遂事件の犯行内容から、真犯人のみが知る犯罪の詳細事実を抽出し、これを裁決項目として、無罪の被験者には裁決項目との識別が困難な非裁決項目を組み合わせて作成されたCITを用いてきた。しかしながら、計画段階での検査となると、既遂事件と異なり、明確な裁決項目が存在しないため、CITによる検査は不可能となる。そこで、探索型のCIT(SCIT)の有効活用が見込まれるため、本研究では非特定型項目（いわゆる catch-all item；以下 ca 項目）の挿入に関する検討を行った。

方法

実験参加者：大学生および大学院生13名（男性6女性7、平均年齢21.5歳）

測定および記録：実験参加者の非利き手第2、第3指先端掌側にディスプレイ電極を装着し、ニホンサンテック製EDA測定ユニット（AP-U030m）で計測した（時定数5秒）。

模擬犯罪：実験内容について説明を受け、実験参加に同意した実験参加者は実験室をでて、別室に向かう。そして、室内に設置されたパーソナルコンピュータを操作して、4種類の動画ファイルからひとつを任意に選択して、再生する。動画には、迷彩柄の服と帽子を着用し、覆面で顔を隠した者がテロ事件の犯行内容について指示を与える。a) 原子力発電所にハイジャックした航空機を突入させる b) ロックコンサート中のスポーツスタジアムに仕掛けた時限式の爆発物を作動させる c) 歩行者天国に乱入し、サバイバルナイフを振りかざしてヒトを殺傷する d) 昼休みの大学キャンパスにおいて、機関銃を乱射する といった内容である。

実験参加者が実験室に戻ってくると、テロ事件の容疑者として、ポリグラフ検査を受けるように依頼される。質問内容は、1 攻撃の対象 2 攻撃の手段についてである。

1については、バッファアイテムを地下鉄とし、歩行者天国、スタジアム、選手村、遊園地の写真を、2については、質問系列の先頭を毒物で固定し、航空機、機関銃、トラック、ランチャーの写真を呈示した。また、両質問系列とも、「今聞いた以外の」で始まる ca 項目が視覚刺激なしに、最後に呈示された。

以上の手続きから、a または b の動画を選択した実験参加者にとって、攻撃手段に関してはヒット項目が含まれているが、攻撃対象については裁決項目がなく、ca 項目がヒット

項目となる。一方、c または d の動画を選択した実験参加者については、攻撃対象についてはヒット項目が含まれているが、攻撃手段については裁決事項がないので消去法的に ca 項目がヒット項目となる。

2種類の質問表は呈示順序を変えて各3回実施した。写真の呈示時間は15秒、写真と写真の呈示時間間隔は25秒一定で、音声による質問がヘッドフォンを介して呈示され、実験参加者は「いいえ」という否定の返答を行うように指示されていた。

なお、実験参加者は実験参加に同意した時点で500円のクオカードを受け取ることができ、さらに各質問について指示された内容を隠し通せた場合には、1質問について追加のクオカード1枚を受け取ることができることが約束されていた。

結果

Fig.1には、犯行対象と犯行手段の質問に対して生じた平均SCR振幅の結果を示した。項目(hit, non)と質問系列(裁決, ca)に関する2要因の分散分析を実施したところ、項目の主効果、系列の主効果が有意で、交互作用は有意傾向であった（それぞれ、 $F(1/12)=9.55$ $p<.01$; $F(1/12)=14.55$, $p<.01$; $F(1/12)=3.25$ $p=.09$ ）。以上の結果から、テロ行為の対象および手段について、視覚刺激で明確に裁決項目が示される場合は非裁決項目との反応差が顕著に生じるが、裁決項目のないca系列では反応量が全体に低下する。そして、ca項目がhit項目に相当する系列では、非裁決項目との反応差が不明確になるといえる。この点については、個人差が大きく、ca項目を裁決項目と同等の有意刺激と実験参加者が認識している場合には非裁決項目とのSCR振幅の差が明らかになることが内省報告の結果から判明した

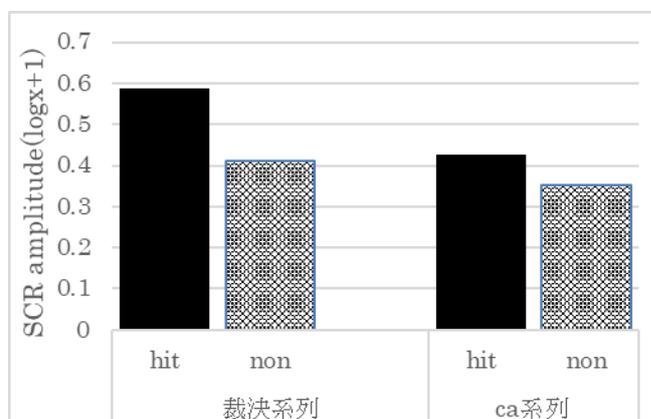


Fig.1 SCRの結果